

平成 9 年度 特別研究功労賞推薦書

受賞対象者 Juhn A. Wada 先生

(カナダ ブリティッシュ コロンビア大学 神経科学・神経学教授)

Juhn A. Wada 先生は昭和 21 年北海道帝国大学医学部を卒業、23 歳の若さで医師となりました。戦前には飛び級の制度が残っていて、先生は小・中学校でこの特典を 2 度受けられたからです。Wada 先生の英才ぶりを伝えるご経歴の一端です。先生は昭和 28 年同大精神神経科助教授、29 年文部省海外研究員として米国ミネソタ大学、ついでカナダマギル大学で神経科学の研鑽を積まれました。31 年カナダブリティッシュコロンビア大学に移り、以来今日まで 40 年にわたり同大脳神経研究所で神経科学と神経学、とくに臨床および実験てんかん学の研究を主宰されました。

Wada 先生は昭和 24 年「Sodium Amytal の頸動脈注射の臨床的実験的観察」と題する論文を発表されました。今日世界で広く行われているワダ・テストの手法は、B5 版 1 頁のこの小論文に尽くされています。当時 Wada 先生は「癲癇性痙攣発作発呈機序の研究」(内村裕之:癲癇の研究、1952)に努力を傾注されていました。Amytal 頸動脈注射は、けいれん発作の起始と持続に関わる皮質/皮質下の役割を解明する目的で行われた研究です。発作発射の拡張・伝播の神経機構、とりわけ発作全般化にかかわる大脳半球間ならびに皮質・皮質下関係の問題は、半世紀たった今日も先生の変わらぬ研究分野の一つです。

カナダに定着されてから今日まで Wada 先生は、300 余編の原著論文と著書 11 冊を著されました。その内容はヒト大脳半球非対称性の問題とてんかんの神経生物学に二分することができます。ワダ・テストによって、個人差をもつヒト大脳半球機能の非対称性を客観的に把握することが可能となり、それに対応する脳組織機構の非対称性が言語発達以前、すなわち胎生期に既に存在することを明らかにされました。言語・記憶に関する「利き脳」側を決める本法は、脳外科手術とりわけ、てんかん外科治療の安全性を確かめる検査法として、世界で広く行われています。

Wada 先生はてんかん発作の生成とその進化過程を「燃え上がり現象」として捉え、系統的な実験観察を通して、遺伝素因の役割、発作伝導脳内経路、発作反復による進行性脳内変化の様態を明らかにしてきました。それはまた難治てんかんの脳外科治療の理論的体系の確立に寄与しました。脳梁前半切戴術はその一つです。ヒトてんかんの理想的なてんかんモデルである燃え上がり現象の系譜は Wada 編単行本「キンドリング」として、昭和 5 ユ年第 1 巻発刊以来今日まで 4 巻を重ね、斯界研究者の座右書となっています。

Wada 先生は昭和 36 年以来今日まで、ブリティッシュコロンビア大学脳神経研究所に日本からの若い研究者を招き、主として実験てんかん学の指導にあたられました。その数は 40 余名に上っています。また先生が会長を務められた国際てんかん学会議(昭和 53 年、バ

ンクーバー)、国際臨床神経生理学会(平成 1 年、シアトル)その他の関連学会に日本から多くの研究者を招き、わが国の研究業績の紹介を推められました。昭和 56 年国際てんかん学会議(京都)が、国際神経学会と国際臨床神経生理学会との連携のもとに開催されたのは、Wada 先生のご努力に他なりません。昭和 53 年日本てんかん学会に設けられ、これまで 19 回の受賞者を輩出した JUHN AND MARY WADA 奨励賞は、先生ご自身のご寄付によるものです。

先生は和魂洋才の人であります。数多くの欧米の学会賞に加えて、平成 4 年にカナダ政府から The Order of Canada、平成 7 年には日本政府から勲二等瑞宝賞が授与されました。このたびてんかん治療研究振興財団の設立 10 周年にあたり、Juhn A, Wada 先生を特別研究功労賞受賞者としてご推薦いたす所以です。

国立療養所静岡東病院(国立てんかんセンター)名誉院長
清野 昌一